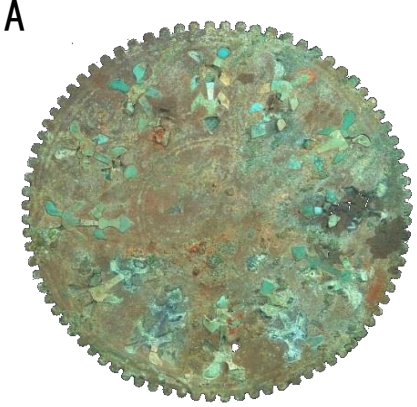
千石コレクションの内訳

平成29年1月6日現在

事項		時代	個体数	内寄託	備考
鏡関連資料	鏡	二里頭～戦国春秋	67	–	
		漢～三国	94	2	鏡台2基を含む
		隋・唐～	141	6	刀子等を含む
		その他	14	–	
		小計	**316**	8	
	化粧道具他	漢他	47	–	漆奩・櫛・簪・刷毛・篦・漆器（耳杯・筒型容器・蓋）等
		小計	47	–	
		計	**363**	8	
その他資料	金彩龍紋盤	前漢	1	1	金彩絵方格規矩四神鏡参考資料
	その他	漢～隋・唐，現代	12	–	瑯・案・三彩俑・褐釉馬・加彩駱駝・展示具等
		小計	13	1	
		計	**13**	1	
		合計	**376**	9	

■主たる鏡の特性

A



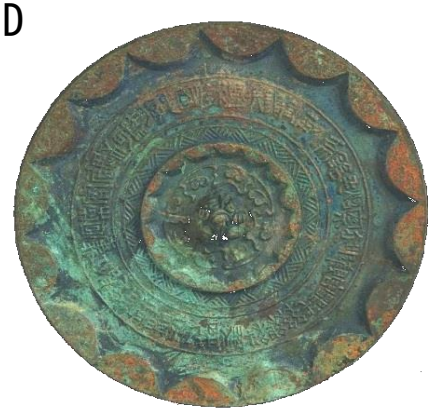
名称	緑松石象嵌鋸歯縁鏡　《りょくしょうせきぞうがんきょしえんきょう》 (1)				
時代	夏（二里頭）【BCE17-16C】	直径（cm）	21.8	重量（g）	1,349
所見	周縁が鋸（のこぎり）の歯のようになっていることから、鋸歯縁鏡と呼ばれている。紋様のある画像面を鏡の表面とすれば、ひもを通す孔のある鈕はこの裏面にあり、X線透過画像によって確認することができる。表面に紋様がある点と、その裏面に鈕がある点が他の銅鏡と大きく異なっている。青銅鏡としては最古級と考えられるが、姿を映す一般的な鏡とは用途が異なり、光の反射を利用した呪術・祭祀具として使用された可能性がある。 青緑色の宝石は緑松石（トルコ石）である。鏡の一部を凹ませ、そこに加工されたトルコ石をはめ込み、紋様としている。トルコ石の産地はイランが有名であるが、近年では中国産の可能性も考えられている。トルコ石を埋めた紋様が何を表しているのか不明であるが、中央に頭を向けた人や、炎、光が広がる様子にも見える。 表面の中央部は二重の同心円が浅く描かれているが、この区画の中には紋様はなく、わずかに研磨されている。この部分に光を反射させたり、姿を映したりしたのであろうか。また詳細に観察すると、部分的に布が付着していることがわかる。				

B

名称	孔雀石象嵌透彫鏡　《くじゃくいしぞうがんすかしぼりきょう》 (50)				
時代	戦国　【BCE4C】	直径（cm）	10.7	重量（g）	169
所見	丸い外形の中に四角い方格の紋様が特徴的な鏡である。天は円形であり、地は方形である、という宇宙観を反映させた紋様で、後の時代に引き継がれた思想である。透彫りの紋様がある背面（写真の面）に、別作りした鏡面（写真の裏側）をはめ込んでおり、二枚重ねの構造となっていることが最大の特徴である。表裏の銅合金の比率を変えて別鋳することによって、複雑な紋様が容易に表現できる背面と、姿がよりよく映る白銀色の鏡面を組み合わせている。 平らな方格や外周の表面に、縞状で緑色の宝石（孔雀石＝マラカイト）が埋め込まれている。方格の四隅にはハート型の紋様があり、小さな鈕の周囲には、四枚の葉のような紋様が配置されている。さらに、紋様を構成する線の中には、細線によって表された渦を巻いたような紋様が確認できる。				

C

名称	彩絵人物車馬鏡　《さいかいじんぶつしゃばきょう》 (70)				
時代	前漢　【BCE2C】	直径（cm）	23.1	重量（g）	774
所見	鈕は、三本の隆起線があることから三弦鈕と呼ばれている。鈕を中心として同心円の界圏を二重に巡らせ、背面を三分割する。 外区には、紋様は鋳型に彫り込まれた細線ではなく、赤、白、黒、紫、黄の顔料で人物が登場する様々な場面が描かれている点が最大の特徴である。中央付近にも紋様がありそうだが、現状では明らかにできない。弥生時代の福岡県三雲南小路遺跡からも同種の鏡が出土しているが、絵画は失われている。 外区の絵画は、四つの小円によって四分割され、次の四つの場面に分けられている。 ①馬上から後ろ向きに獣を射ようとしている狩猟の場面、②馬を下りて出迎えする場面、③樹下で卓を囲んだ宴の場面、④正装した数人ずつが対面する場面、からなる。 鏡に顔料で描かれた絵画は残りにくいため、全体としてどのような物語になるのか詳細は明らかでないが、他に類例が少なく、服装や習俗を知る上でも非常に貴重な資料である。また、モノトーンの単調な凹凸表現の鏡背から脱却し、華やかな顔料を使った色彩豊かな絵画表現が採用された状況もうかがえる。				

D 	名称	異体字銘帯鏡（清銀鏡）　《いたいじめいたいきょう》　(83)				
	時代	前漢　【BCE2C】	直径（㎝）	18.2	重量（g）	719
	所見	変わった字体の銘文があることから、異体字銘帯鏡と呼ばれる。鏡の中央の鈕は、世界の中心にある山の峰を表現しているように見えることから連峰鈕と呼ばれ、その周囲には雲気が漂う。これは、宇宙図としての天地の構造を示すため、山岳を強調しているためと考えられる。また、外縁には連弧紋が巡っている。 一般的に、銘文は縦書きにすることが多いが、本鏡は横書きで、左から右に書かれており、珍しい類例である。 「秋風起、心甚悲。時念君、立輩徊。常客居、思不可爲游中國、侍來歸。清㝡銅華以爲鏡乎、炤察衣服觀容貌乎、絲組雜。」とあり、叙情的な内容となっている。 また、銘文に「中国」の文字が鋳出されることも稀少であるが、これは「中央」の意味を表現しており、国名を表すものではない。				
E	名称	重列式神獣鏡　《じゅうれつしきしんじゅうきょう》　(131)				
	時代	後漢　【CE2C】	直径（㎝）	16.6	重量（g）	796
	所見	漢代に流行した陰陽五行説や神仙思想に基づいた様々な神仙や霊獣が、上下五段の棚状に分けられた区画の中に、一方向から見るように配置されていることから、重列式神獣鏡と呼ばれる。四神（朱雀、白虎、玄武、青龍）があり、鏡に東西南北の方位が示されていることがわかる。他の類例から、後漢末の建安年間（A.D.196-220）に製作された鏡と想定され、呉郡との関連が考えられる。紋様表現は極めて秀逸であり、鋳上がりは精美である。 最上段には平和な世に現れるという南極老人、その下には琴の名手である伯牙（はくが）が琴を弾いている。半球形の鈕を挟んで、左には東王父、右には西王母がそれぞれ侍仙とともに表現されている。二神仙は陰陽を象徴する存在であり、伯牙（はくが）の奏でる音楽は両者の調和を図るとされた。鈕の下方には、左に黄帝、右に句芒（こうぼう）が並ぶ。他に黄帝をはじめ、木火土金水の五星を神格化した五帝がいる。天皇大帝は最下段に配置されており、天界の神々を統御し、天の運行の中心であることから、北極星に相当するとされている。神仙像の周辺には、時計方向の二、三時に白虎、七時に玄武、九、十時に青龍、十一時に朱雀が配置されるが、東西南北と天地左右が逆転した天界を表現している。一段高い縁部には、先端が渦を巻く唐草を表現した紋様帯が巡る。				
F	名称	画像鏡　《がぞうきょう》　(136)				
	時代	後漢　【CE2C】	直径（㎝）	22.5	重量（g）	1,450
	所見	やや扁平な浮彫りで表された紋様が漢代の「画像石」の図像に似ているために、「画像鏡」と呼ばれている。小さな突起である乳によって区画された空間に、神仙や車馬、舞い、曲芸、故事由来の図像などを表すことが多い。日本では主に古墳の副葬品として出土することで知られている。 内区の銘文に「西王母」、「東王」と記されているように、鈕を挟んで西王母と東王父がそれぞれ対置している。西王母は西方に住む女神で、不老長寿の象徴として現在でも信仰されている。左右に三人の仙人を従え、左は扇、右はおそらく温酒尊と鏡を捧げているのかもしれない。対する東王父は、後の道教像のような顎ひげを貯え、左に武器をもつ仙人、右に逆立ちの軽業を演じる仙人が従う。二神の間には、長い筒袖を翻し、裳裾を広げた舞人が旋舞し、同じく裾を引いた侍者とともに描かれる。さらに、五頭立ての車馬など精細で写実的な図像が展開している。 外区の銘文には、作鏡者の「騶（すう）氏」の銘が表されていることから、会稽郡（かいけい）や呉郡を含む江南系の鏡と位置づけられる。多頭立ての車馬表現も、この地域の特色である。				

G

名称	鍍金対置式神獣鏡　《ときんたいちしきしんじゅうきょう》　(147)				
時代	後漢　【CE2C】	直径（cm）	14.9	重量（g）	526
所見	ひれ状の装飾をもつ大きな神像と、その両側の二獣の三像が一つの単位紋様となっており、それが中央の鈕を挟んで向かい合って対置することから、「対置式」と呼ばれている。紋様は、漢代に流行した陰陽五行説や神仙思想に基づいた様々な神仙や霊獣が半肉彫りで表現されている。鍍金は、水銀に溶かした金を塗り、加熱して水銀を蒸発させることで金メッキするという技法（金アマルガム法）で行われた。日本では、主に古墳時代前半の古墳から出土する例が知られている。 鈕の頂部には、獣像の象嵌がある。主紋様は、ひれ状の装飾をもつ二体の神像は、蕨手状の雲気をまとった西王母と東王父で、いずれも龍虎座に座る。さらに、西王母の足元には鶴を、東王父の足元には亀を配している。他の神像のうち、手に杖をもち弓状のものを示しているのが黄帝である。黄帝は西王母から授けられた呪力をもつ符を示し、表れた人頭鳥身の玄女を迎え入れようとしている。これらの図像と対をなす位置には、琴の名人である伯牙（はくが）が琴を弾き、その良き理解者である鐘子期（しょうしき）が聞き入る様子が表されている。鏡縁部には、神像や獣像が表された画紋帯が巡る。画紋帯には、六匹の龍が雲車を引き、神仙が丸いものを捧げもつ表現があり、日月の誕生や運行に関する説話とされている。				

H

名称	四神十二支紋鏡　《ししんじゅうにしもんきょう》　(173)				
時代	隋-唐　【CE6-7C】	直径（cm）	24.8	重量（g）	2,132
所見	方格の周囲に四神（玄武、青龍、朱雀、白虎）が巡り、その周りに動物で示された十二支（ネズミ、牛、虎、兎、龍、蛇、馬、羊、猿、鳥、犬、猪）が巡る。本来、十二支は方位を表すものであったが、この頃からそれぞれに動物が当てられて、鏡に図像として表現されるようになった。円形の鏡に方格の紋様、周囲を巡る銘文、四神の紋様など、鏡の伝統的要素を残しつつ、主題となる紋様に新しい要素が加えられている。 鈕は方格で囲まれ、その下から獣の頭と手脚、尾が覗いている。四神の間には四つのV字形があり、その中の頭部だけ表現された怪獣は下辺の突線をくわえている。こうした獣頭の表現は隋代の石刻や陶磁にも用いられた意匠であり、起源は西方にある。また、四神の周りの火炎形の瑞雲も墓誌を飾る雲紋と類似している。銘文帯の外側は十二等分され、十二支を配置する。十二の仕切りは珠紋で囲まれた華紋となっており、外縁には唐草紋を巡らせる。鈕から左右に向けて細い直線が鏡縁に向かって延びており、紋様を描くための設計線（見当線）と考えられる。 銘文は「淮南起照 仁寿傳名 琢玉斯表 鎔金勒成 時雍炎晋節茂朱明 援模監徹 用擬流清 光無虧満 葉不枯榮 圖形覧質 千載為貞」と読める。				

I

名称	団華紋鏡　《だんかもんきょう》　(179)				
時代	隋-唐　【CE6-7C】	直径（cm）	23.7	重量（g）	2,270
所見	団華紋とは、著しく図案化された丸い花形紋を基本単位とする紋様である。花弁を上から見たような、西アジア系のロゼット（円形の敷物状の葉）に由来する花形を円内に細密かつ複雑に表し、鈕の周りに六つを均等に配置している。 鏡全面は均整のとれた六分割のシンメトリー・モチーフに覆われ、あたかも万華鏡を覗いたような無限の錯覚に引き込まれる。 鈕は半球形で、比較的大ぶりで。紋様は、銘文帯を挟んで内外に二区分されている。内側の団華紋の中は、六弁蓮華様の中心飾りと、その周辺に六つの側面向きのパルメットを放射状に配して構成されている。団華紋の隙間には、パルメット紋を満たした半円形の団華紋や、ナツメヤシの葉のようなパルメット紋が充填され、全体に幾何学的で均整のとれたデザインとなっている。銘文の外側は十二に区画され、それぞれ唐草に類似した三種の紋様が交互に繰り返されている。そのうちの一つは、両側の巻き葉が立体的なスタイルになる。 銘文は「湛若止水 皎如秋月 清暉内融 菱花外發 洞照心膽屏除妖孽 永世作珍 服之無沫」と読める。				

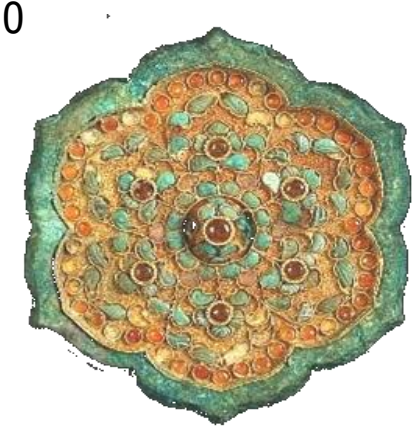
J	名称	海獣葡萄鏡　《かいじゅうぶどうきょう》　(193)					
	時代	唐　【CE7C】	直径（㎝）	26.4	重量（g）	3,145	
	所見	海獣とは海外の獣という意味で、葡萄とともに表されたものは特に海獣葡萄鏡と呼ばれている。葡萄はシルクロードを経て西方からもたらされたもので、多産と豊穣をもたらすものとして中国的な楽園図像の中に吸収され、海獣とともに国際色豊かなデザインとして取り入れられた。唐代を代表する鏡であると同時に、日本でも遺跡から出土したり、神社に奉納されていたり、類例の多い鏡式である。 中央の鈕は、角のある獣形をしている。体には体毛があり、小獣をくわえている。その周囲に配置された瑞獣も同じく角があり、体毛が表現される。全体に荒々しく、獅子のイメージに近い。他にも天馬や小獣、上にのけぞる獣などがある。 鏡の内側と外側は二本線の界圏と帯状の紋様帯で区画される。紋様帯には唐草紋が巡り、その隙間に蜂、蝶、蜻蛉（とんぼ）が表されている。外側の区画では鳥と獣が左に旋回しており、その背面には葡萄の房と蔓草が展開している。水滴形をした葡萄の粒など、いずれも繊細で丁寧に表現されており、迫力ある図像となっている。					

K	名称	海獣葡萄鏡　《かいじゅうぶどうきょう》　(212)					
	時代	唐　【CE7C】	直径（㎝）	16.6	重量（g）	1,162	
	所見	海獣とは海外の獣という意味で、葡萄とともに表されたものは特に海獣葡萄鏡と呼ばれている。葡萄はシルクロードを経て西方からもたらされたもので、多産と豊穣をもたらすものとして中国的な楽園図像の中に吸収され、海獣とともに国際色豊かなデザインとして取り入れられた。唐代を代表する鏡であると同時に、日本でも遺跡から出土したり、神社に奉納されていたり、類例の多い鏡式である。 特に本鏡は、奈良県高松塚古墳出土鏡と同型で、他にもこの種の同型鏡は中国及び日本から10面以上発見されている。 中央の鈕は、伏せた獣形をしている。周囲には瑞獣が三匹、龍とされる獣が三匹配置されている。龍は角がある細長い頭を持ち上げており、体には鱗状の表現が見られる。背面には葡萄の房と蔓草が展開している。 鏡の内側と外側は、連続する点紋がある界圏で区画されており、外側の区画では左に旋回する鳥や獣の他、蝶や蜻蛉が表され、背面には葡萄の房と蔓草が展開している。					

L	名称	貼銀鍍金双獣双鳳紋八稜鏡　《ちょうぎんときんそうじゅうそうほうもんはちりょうきょう》　(234)					
	時代	唐　【CE8C】	直径（㎝）	19.8	重量（g）	1,540	
	所見	鏡形は八個の花弁状の突起がある八稜形。貼銀鍍金とは、紋様を裏側から打ち出した銀板に鍍金を施し、それを青銅製の鏡の本体に貼り合わせる技法である。銀貼鏡は、平脱鏡や螺鈿鏡などとともに宝飾鏡と総称される。これらは、特別な技術と意匠を駆使した華麗で多彩な鏡であり、単なる鋳出しの銅鏡には表現できない一層の装飾性と色彩的絵画的な精華が反映されている。盛唐期の金属工芸の一つの到達点を示す作品である。そこには、単なる鋳出しの銅鏡には表現できない一層の装飾性と色彩的絵画的な精華が映し出されている。 中央の鈕の頂部は花のつぼみのような紋様で飾られ、周囲は小さな点紋が巡る。そこから外方へ向かって蔓と葉が伸びる唐草紋が展開し、外縁付近には石榴の実が描かれている。石榴も葡萄と同様、実が多く成ることから、多産と豊穣を表しているとされている。唐草紋の間には鳳凰と瑞獣を交互に、外縁付近には小鳥が配置されている。その体部には細かな毛の表現も見える。 図柄の地の隙間には、魚々子紋（ななこもん）が整然と稠密に充填されている。これは、極小の凹面をもつ丸鏨で細粒の半円球紋を均等に打ち出し、余白のすべてに敷き詰める高度な彫金技法である。このため、銀板の地の硬質な冷感を緩和させ、乱反射による柔和で間接的な輝きを与えるとともに、図柄を相対的に浮き上がらせる効果をもたらしている。					

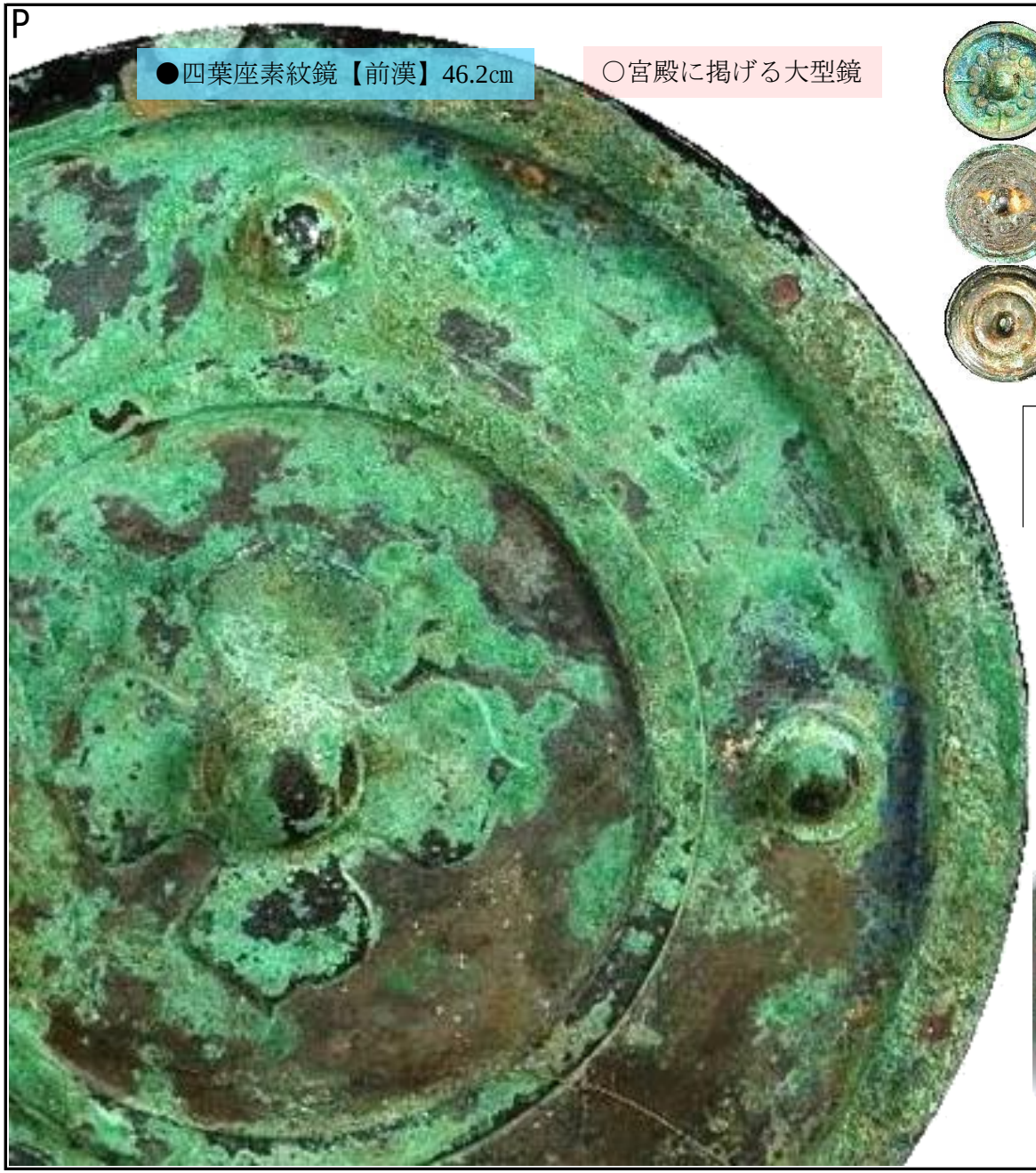
M	名称	金銀平脱唐子唐草紋八花鏡　《きんぎんへいだつからこからくさもんはっかきょう》　(284)				
	時代	唐　【CE8C】	直径（cm）	29.7	重量（g）	2,780
	所見	八弁の葵花形をなす八花形の大型鏡。平脱とは、紋様の形に切った金や銀の薄い板を、器物に貼り付けて飾る技法のことである。その手順は、①金属板を器物の漆下地や中塗り面に貼る、②金属板も含めて、器物全体に漆を塗り、固める、③金属板上の漆塗膜を取り除き、金属板を露出させる、④金属板に主に蹴彫りによって繊細な紋様を浮き上がらせる、という方法で行われた。平脱は正倉院では鏡の他、琴や大刀にも使われている技法である。金と銀の造形の繊細さが際だつ上、その色彩の対比が鮮やかで、唐代美術の優美さが伝わる。 外縁付近には、二本の線を絡めたような銀の界線があり、その内側には、銀の蔓草と、金の子供や花紋が配置されている。子供はふっくらとしており、唐子と呼ばれるもので、蓮台の上で葉を付けた枝をもつ。繊細な銀の中で金がアクセントとなり、華やかさを増している。外縁部には、枝をくわえて飛ぶ銀の鳥や金の雲気紋、植物紋が配されている。金属板は、非常に細かい蹴彫りで装飾されており、連続する鏨痕が観察できる。 平脱鏡は、宝飾鏡と総称され、特別な技術と意匠を駆使した華麗で多彩な鏡であり、単なる鋳出しの銅鏡には表現できない一層の装飾性と色彩的絵画的な精華が反映されている。盛唐期の金属工芸の一つの到達点を示す作品である。				

N	名称	螺鈿瑞花紋八花鏡　《らでんずいかもんはっかきょう》　(287)				
	時代	唐　【CE8C】	直径（cm）	30.5	重量（g）	2,560
	所見	螺とは巻き貝の総称で、鈿とは何かに埋め込んで装飾することを意味する。特に螺鈿は、ヤコウガイなどの貝殻を美しい虹色の光沢層がでるまで磨き、そして紋様の形に整えて、暗褐色の樹脂に埋め込んで仕上げる装飾技法をいう。貝以外に琥珀やトルコ石、ラピスラズリの細片で飾られることが多い。ヤコウガイは南洋産、宝石はミャンマーやアフガニスタン産と考えられており、広範囲にわたる交易が行われていたことを示している。正倉院にも類似する花紋の螺鈿鏡が伝わっており、唐代第一級の鏡であったことがわかる。 白銅質の鏡体全面に、花紋が散りばめられている。花紋は小型の鈕を中心として八区画の紋様帯が同心円をなして放射状に展開する。それぞれの花紋は、ヤコウガイを切り取り、そこに毛彫りをした後、その線を黒色で彩色しており、さらにアメ色の琥珀をはめ込んでいるものもある。花紋は樹脂状のもので埋め込まれており、そこには、トルコ石やラピスラズリといった宝石の微細片が多数充填されている。虹色に輝くヤコウガイと宝石の輝きは、今も色あせることなく美しさを演出している。 螺鈿鏡は宝飾鏡と呼ばれ、特別な技術と意匠を駆使した華麗で多彩な鏡であり、単なる鋳出しの銅鏡には表現できない一層の装飾性と色彩的絵画的な精華が反映されている。盛唐期の金属工芸の一つの到達点を示す作品である。				

O 	名称	金粒珠玉象嵌宝相華紋六稜鏡　《きんりゅうしゅぎょくぞうがんほうそうげもんろくりょうきょう》　(292)				
	時代	唐　【CE8C】	直径（cm）	8.8	重量（g）	201
	所見	外縁の六箇所に稜角を設け、その間が内側に刳り込まれて、全体が六つの花弁のような形にしつらえられた小型の六稜鏡。金製の薄い板を縦方向に置いて紋様を縁取り、そこに宝石をはめ込んで、さらに金粒で覆い尽くしている。 こうした象嵌鏡は、平脱鏡や螺鈿鏡などとともに宝飾鏡と総称される。これらは、特別な技術と意匠を駆使した華麗で多彩な鏡であり、単なる鋳出しの銅鏡には表現できない一層の装飾性と色彩的絵画的な精華が反映されている。盛唐期の金属工芸の一つの到達点を示す作品である。 宝相華紋を形づくる金の板の隙間には、瑪瑙、トルコ石、ピンク水晶などの貴石をはめ込んで主紋様とし、さらにその隙間を非常に微細な金粒で充填している。金粒は、中央やその周りに配置された六つの瑪瑙の周囲にも一列ずつ貼り付けられており、美と技術の粋が詰まった鏡である。こうした金工芸の細緻を極めた細金細工は、ペルシャ起源の技法であり、唐代全盛期の文化の華やかさと国際性を凝縮しているといえよう。				

■鏡の多種性と多様性

P



●四葉座素紋鏡【前漢】46.2㎝

○宮殿に掲げる大型鏡

●連珠紋鏡【前漢】4.2㎝

○死者に捧げる小型鏡

●四葉紋鏡【南北朝】3.5㎝

●連珠紋鏡【宋】3.8㎝

○方鏡・六花鏡・八陵鏡

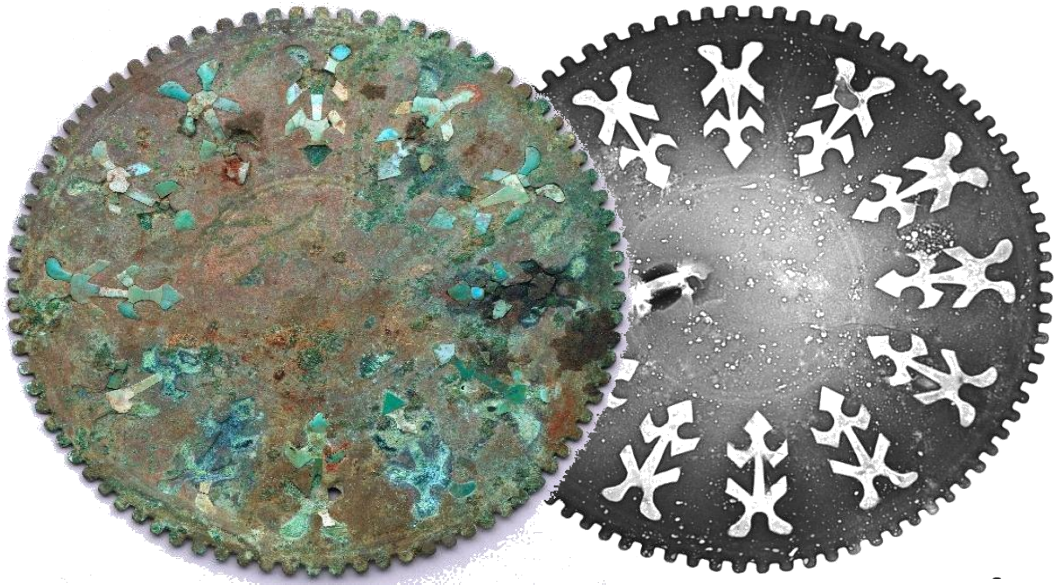
●海獣葡萄鏡【唐】11.9㎝

●萄螺鈿瑞花紋六花鏡【唐】10.6㎝

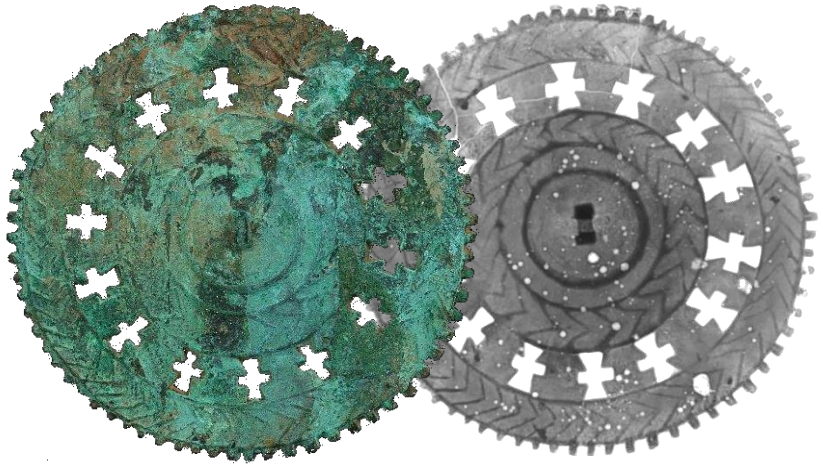
●貼銀鍍金双獣双鳳紋八稜鏡【唐】15.8㎝

■世界最古の鏡（約3，700年前）の系譜

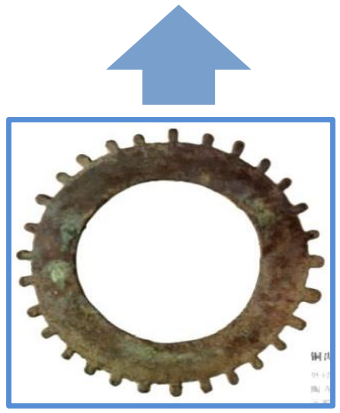
Q



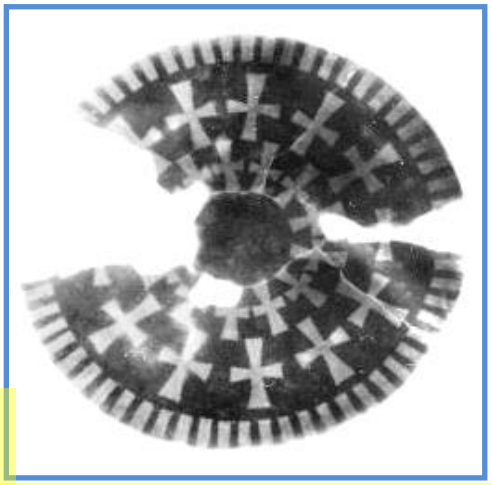
●緑松石象嵌鋸歯縁鏡 【夏（二里頭）】（約3,700年前）21.8㎝



●鋸歯縁鏡【商】（約3,500年前）16.3㎝



歯車形銅璧（環）【陶寺文化】（約4,000年前）12.5㎝
山西省：陶寺遺跡

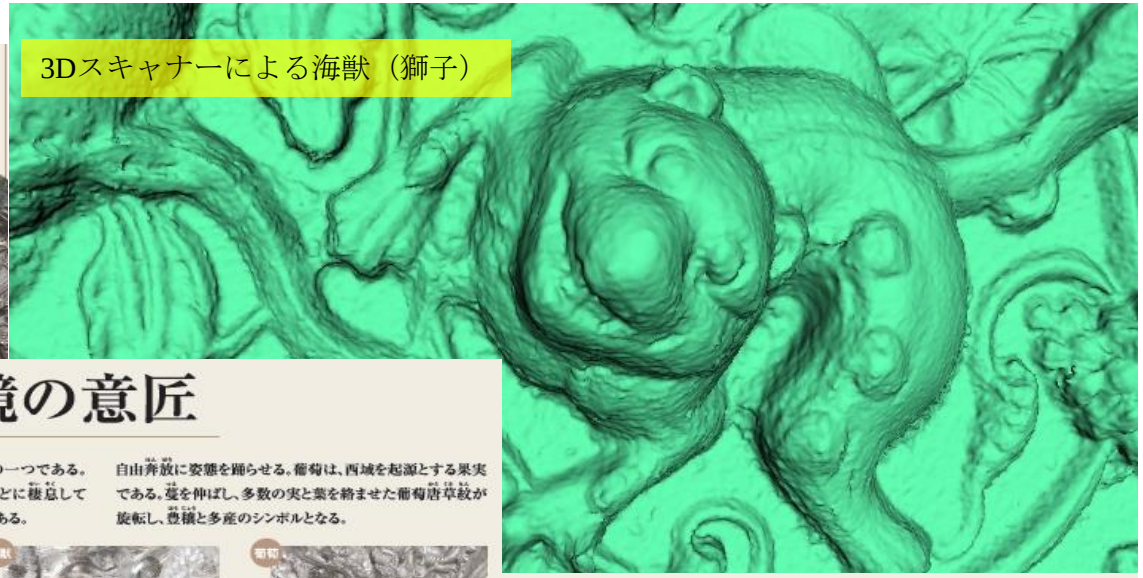


銅円盤【夏（二里頭：第3期）】（約3,600年前）17.0㎝
河南省：二里頭遺跡

東アジアにおける青銅器の出現は、紀元前三千年紀後半の龍山時代にさかのぼるとされてきた。
ところが、千石コレクションの緑松石象嵌鋸歯縁鏡は、歯車状の周縁をもつ山西省襄汾県陶寺遺跡から出土した龍山文化の歯車形銅璧（環）にその起源をもち、またトルコ石象嵌の技法は、河南省偃師市二里頭遺跡出土の銅円板に類似している。
このため、コレクションの鋸歯円鏡は斉家文化の銅鏡より年代が古い可能性があり、銅鏡としては世界最古に属する。また、中国の銅鏡をめぐっては、中国自生説と西方からの伝来説とが対立してたが、前者が有利となることも指摘しうる。

■海獣葡萄鏡綜覧

R



海獣葡萄鏡の意匠

海獣葡萄鏡は、隋唐時代を代表する銅鏡の一つである。「海獣」は、外来の異獣を意味する。中東などに棲息していたライオン（獅子）の姿が元になった瑞獣である。

自由奔放に姿態を踊らせる。葡萄は、西域を起源とする果実である。蔓を伸ばし、多数の実と葉を絡ませた葡萄唐草紋が旋転し、豊穣と多産のシンボルとなる。

さらに、麒麟や天馬、孔雀、龍などの聖獣・瑞鳥も登場する。それらを取り巻くように、鳥や蝶、蜂、蜻蛉などが舞う。

これらは飛翔して天に通じ、蛹から成虫へと変化する姿は不死の世界をあらわしている。

西域からシルクロードを東伝した図像が、一枚の鏡背面で融合した。これらが、中国的な楽園図像の中に吸収されゆくことよって、異国的な吉祥性と華麗な様式美を兼ね備えた、国際色豊かな新たなデザインとして精彩を放っている。

海獣葡萄鏡の年代

色鮮やかな女子群像や四神像などの壁画で著名な奈良県高松塚古墳からは、一面の海獣葡萄鏡が出土している。この鏡と原型の鏡を同じくする同型鏡が、中国西安市の独孤思貞墓から発見されている。独孤思貞は、神功二年（698年）に埋葬されたことが墓誌の記載から確定している。

これにより、日中の二つの墳墓から出土した同型の海獣葡萄鏡は、7世紀後半から末頃の年代が与えられることになった。そして、高松塚古墳の海獣葡萄鏡は、古墳の築造年代や被葬者を推定するための有力な「証言者」となったのである。

千石コレクションには、これらと同型の海獣葡萄鏡が含まれている。日本と中国では10面以上の同型鏡が確認されており、さらなる研究の進展が期待される。

上）高松塚古墳出土海獣葡萄鏡（奈良文化財研究所所蔵資料写真提供）　下）同鏡

海獣（獅子）と葡萄唐草紋を主紋様とする海獣葡萄鏡は、隋代を経て唐代に全盛行を迎えた。鏡背のモチーフはこの他に鳥虫獣が変幻自在にからまり、精緻で躍動感あふれる紋様構成となっているところに、国際色豊かで活力に満ちた唐文化の特色を看取することができる。
コレクションにはこの海獣葡萄鏡が約40面が含まれ、その多さと誇るとともに、個々の紋様の些細な変遷過程を辿ることによって鏡の年代的推移を知ることが可能となる。

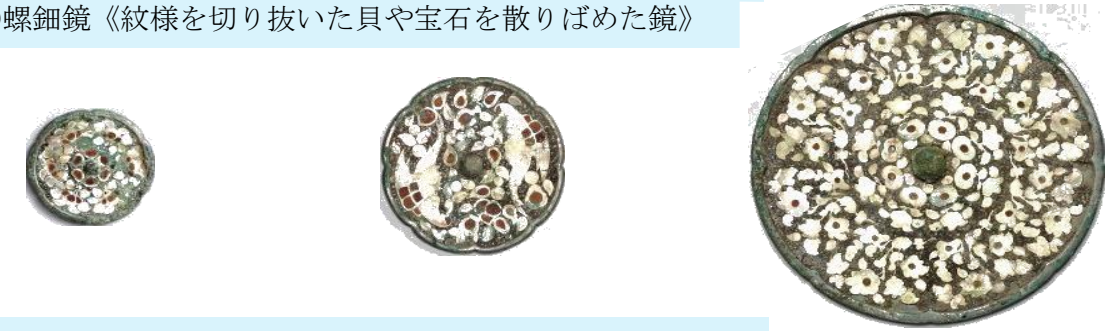
■唐代を彩る宝飾鏡【貼銀鏡・平脱鏡・螺鈿鏡・象嵌鏡】(約1，300年前)

S

●貼銀鏡《紋様を打ち出し鍍金した銀板を貼り付けた鏡》

●平脱鏡《紋様を切り抜いた金銀箔を漆で貼り付けた鏡》

●螺鈿鏡《紋様を切り抜いた貝や宝石を散りばめた鏡》



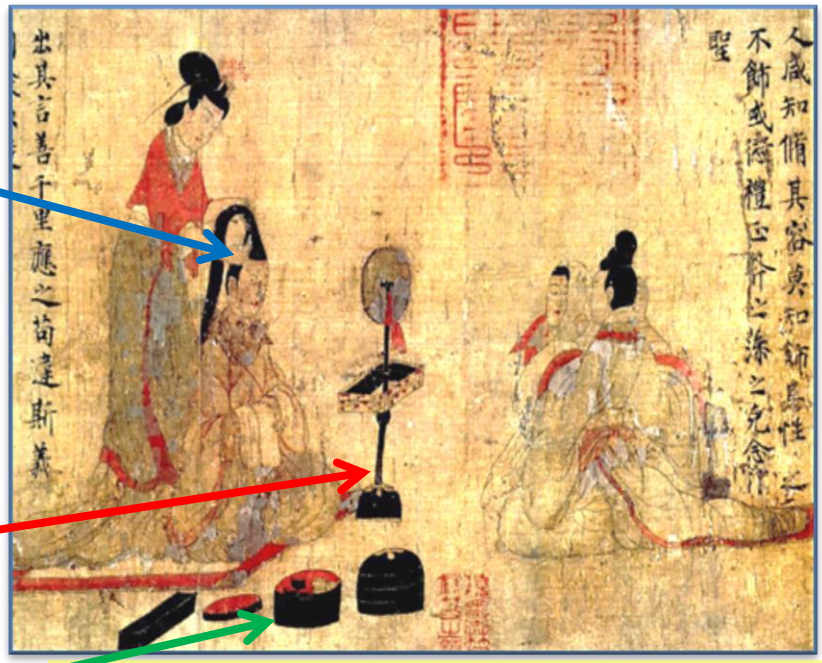
●象嵌鏡《宝石や金粒を貼り付けて紋様を描き出した鏡》

隋に続いて興った唐は、封建制度のもとで政治・経済・文化の繁栄を極め、金工工芸においても最高の技術水準に達した。
宝飾鏡は、唐王朝の最盛期（8世紀前半頃）に豊富な素材と多彩で最先端の工芸技術を駆使して制作され、往時の美意識の結晶として登場した鏡である。
この優美な宝飾鏡を27面保有することになり、最多の面数を誇る。

■鏡と装いの道具

●鏡（漢代）と鏡台

●櫛・簪（こうがい）・篦（へら）・刷毛・耳掻き【化粧道具】



『女史箴図』顧愷之（こがいし）：東晋代【4世紀後半】

●漆奩（しつれん）【化粧箱】

長沙馬王堆１号漢墓出土単層五子奩：前漢代

千石コレクションには、豊富な鏡以外にも化粧や結髪などの[装い」に関連する多様な化粧道具が含まれている。
櫛、簪、刷毛、篦、耳掻き、これらを納める漆奩（化粧箱）や、鏡を包む鏡衣などが極めて良好な状態を保って一括で残されていた。
これらは顧愷之の『女史箴図』【東晋】を彷彿とさせる資料であり、姿見としての鏡の本来の使われ方や、具体的な化粧の方法を示す稀有な資料である。